2008「中日青少年友好交流年」認定事業

「笹川杯作文コンクール 2008」～日本語で応募～ 優勝作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

「カントリー・ロード」

四川大学 生命科学学院　生物科学班　3 年　陳一

それは、何の変哲も無い、小さな町だった。学校への道に大きな川があり、うっそうと茂る木々に覆われた寺がある以外は、これといった特徴もない。都会の喧騒からは遠く、こんじんまりとした古い住宅街や商店街から少しだけ歩くと、畑が広がっていたりする、そんなところだった。

その静かな町で、私は彼女、ユウちゃんに出会った。

ユウちゃんは私より一つ年上で、小学校の図書委員だった。季節外れの転校生で、また外国人ということもあってクラスに馴染めず、それゆえ昼休みにはいつも図書室に篭っていた私とは、すぐ仲良くなった。

どこにでもある苗字と、「由美子」というこれまたよくある名前。彼女が、自分の名前で気に入っているのは “由”だけ、と言ったため、私は彼女を「ユウちゃん」と呼んでいた。そしてユウちゃんも、私の名前を日本語読みではなく、中国語で「いーちゃん」と呼んだ。

ユウちゃんは少し変わった女の子だった。当時流行していた遊びには興味を持たず、私と同じく、読書が大好きだった。特に日本の伝説や歴史に詳しく、沢山の事を教えてくれて、私が話す祖国の話も、楽しそうに聴いてくれた。

「いーちゃんは色んなところに行ってるんだね」ユウちゃんが羨ましそうに言った事がある。引越しと転校を繰り返していた私と違って、地元で生まれ育った彼女は、県内から出たことがない、と言っていた。

「大人になったら、どこにでも行けるよ」私がそういうと、「じゃあ、中国にも行ってみたい」と、彼女は目を輝かせた。

二人で歩く帰り道は、大抵そんな他愛ない会話で占められていた。ユウちゃんと一緒にいる時、私は、日本にいる間は常に意識させられていた国籍の違いを、まったく感じることがなかった。そうして、私達は小さな世界を共有していた。

「カントリー・ロード」という歌を教わったのも、ユウちゃんからだった。彼女はこの歌が好きで、よく口ずさんでいた。

「カントリー・ロード　この道　ずっと行けば　あの町に続いてる気がする」

伸びやかな歌声は静かな空に響き、私は、この帰り道が、いつまでも続けばいいと思った。

私がその町に住んでいたのは僅か一年足らずで、ユウちゃんと過ごした時間はもっと少なかったはずだ。けれど、一緒に歩いた川沿いの道は、きらきら光る川の流れや、真っ青な空に浮かぶ入道雲や、春の野花の香りに彩られ、大事な思い出として、今でも私の心にしまってある。それ

は、「故郷」と呼ぶにふさわしい、やさしくて懐かしい情景だった。

町を離れる日、ユウちゃんは駅まで見送りに来てくれた。元気でね、手紙を書くね、そんなやり取りの後、いつか大人になったら中国で会おうと、約束した。

それからほどなく、私は家族と共に七年間を過ごした日本を離れ、帰国した。住所が何度変わってもユウちゃんとの文通は続いていたが、それぞれの生活に追われる中で、手紙が届く間隔は次第に長くなっていった。私は勉強や日常に忙しく、日本で過ごした歳月は、まるで遠い夢のようにも思えた。電子メールを使ったやり取りが一般的になった頃には、年に一、二回、長いメールを送るだけになっていた。

そうして私は大学生になり、ユウちゃんが短大を卒業した後、地元の役所に就職したことを知った。お互い、大人になったんだなと思う同時に、かつての「中国で会う」という約束は、もう叶う事は無いだろうと、関係が薄れていくのというのは、こういうことなんだと、言い様の無い寂しさをおぼえた。

そして今年の 5 月、大地震が四川を襲った。当時の恐ろしさとショックは、今でも忘れられない。成都にある大学は幸いにも被害がほとんどなかったが、続く余震や混乱は私をひどく疲れさせ、そして心細くさせた。一週間程して、ようやく少し落ち着いた後、私は久しぶりに見たメールボックスに、四通のメールが届いているのを知った。

四通とも、ユウちゃんからだった。一通目は地震当日の夕方で、焦っていたのか短い文面で、私を案じる言葉と、無事なら連絡して欲しい旨が書かれていた。残りのメールはそれぞれ約二日の間隔をあけて送られていて、一通目とほぼ同じ内容だった。返信が無い事に彼女らしくもなく焦れて、思わず同じメールを送ったのだろう。遠い日本で、ユウちゃんは、私を真摯に心配してくれていた。

私は返事を打とうとして、目の前のモニターがぼやけている事に気づいた。突然溢れ出した涙は、連日の疲れでかさついた頬を濡らした。

ユウちゃんに会いたい、と思った。うれしさよりも懐かしさよりも、ただ、会いたかった。会って、どれだけ時が流れても、遠く離れていても、心は繋がっていると言う事を、伝えたかった。

涙を拭い、見上げた窓の外には、悲劇に似合わないほど澄んだ青空が広がっている。まるで、私の心の故郷である、あの町の空の様な。

ふいに、あの歌が聴こえるような気がした。なつかしい町に続く道を歌った、「カントリー・ロード」が。